〔学院情報〕

学院交流会開催される

学院交流会は、学生相互の理解を深めるために毎年秋に行われている行事です。具体的には、学生が２つの班に分かれて、順番にすべての学科をまわり、自分の在籍する学科以外の学科について授業内容などを見学して理解を深めあうものです。各学科での説明も学生が行います。今年は11月６日金曜日に開催されました。

各学科の見学は15時頃から始まりました。ひとつの学科で15分ほどの説明を受け、次の学科へと移動します。学生達は日頃知ることができない他の学科の授業内容の説明に真剣に聞き入っていました。

説明を行う側では、自分の学科をどのようにわかりやすく説明するかという点について仲間同士で知恵をしぼったり手作りのパネルを準備したりと、苦労もあったようですが、たいへん貴重な体験をしたようです。

学科の見学を終えたあとは教職員も交えての懇親会が行われ、学生同士あるいは学生と教職員の交流が深まりました。以下、学生からの声を報告いたします。

言語聴覚学科　１年　高橋幸那

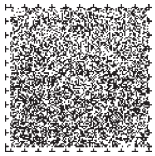
「○○学科って何て略すんだっけ？」「○○学科ってどんなことしてるの？」…入学して半年以上が経つにも関わらず、１年生の教室では時々このような会話が聞こえてきます。そんな知っているようで知らない他学科の勉強内容を、今回の学院交流会ではお互いに楽しみながら学ぶことができました。POによる装具作製実演、SIによる手話を使った伝言ゲーム、RSによる機器や車いすの説明、RBによる盲体験、どれも初めて知ることばかりでとても興味深かったです。ST学科の説明では、２年生による発表に私たちST学科の１年生までもが「へえ～なるほど」と頷いてしまいましたが、他学科のみなさんにもST学科のことを少しはお伝えできたでしょうか。

勉強している内容や目指している職業は違っても、「障がいを持つ方々やコミュニケーションで困っている方々の力になりたい！」という気持ち、それがどの学科にも共通する思いであり、国リハ学院生を繋いでいるものなのだなぁと感じました。

義肢装具学科　２年　小林奈月

先日行われた学生交流会を最も楽しみにしていたのは、他でもない私たちPO学科です。なぜなら、普段隔離されたPO棟内で、３学年27人こぢんまりと授業を受けている私たちにとって、交流会は堂々と学院棟に入って他学科を見学できる最大のチャンスだからです。また、私たちPO学科がなぜ一学科だけ隔離されているのかを納得してもらえる、年に一度のチャンスでもあります。

当日、まずPO学科の紹介では３年生の手馴れた装具製作実演で、他学科のみなさんは歓声を上げたり、写真を撮ったりと予想以上の好感触を得られました。続いて他学科の紹介では、車いす操作や言語療法の実演、手話を使った伝言ゲーム、視覚障害体験など、どの学科も趣向を凝らした紹介で見る人を飽きさせず、充実した時間を過ごすことができました。その後の懇親会ではさらに他学科との交流が深められ、楽しみにしていた交流会は大成功に終わりました。



視覚障害学科　１年　松﨑英子

学院3階（視覚障害学科）フロア以外、他学科のフロアや、特に義肢装具士養成棟に足を運ぶ機会があまりなかったので、今回の交流会で初めて他学科のことを学ぶことができました。説明も各学科多種多様で、手話を使った伝言ゲーム、発語の仕方による聴覚障害の時期の判別方法、車いすの操作、足型作成の実演等、それぞれの学科ごとに特色がありとても新鮮でした。

逆に、私たちは、アイマスクをしてお茶を入れる体験をしてもらいました。各学科の見学や体験をして、改めて当たり前のようにある五感の重要性や、援助の必要性を感じることができました。

また、夜に行われた懇談会は多くの学生や先生方が参加し、各テーブルに分かれて他学科の学生との交流があり、また、チームに分かれてゲームをする等、とても楽しい時間を過ごすことができました。

今回の交流会に参加して、たくさんの情報を得ることができ、自分自身の視野も広がったように思います。今後の学院生活にも活かしていきたいと思いました。

手話通訳学科　２年　平良藤乃、斎藤朝美

最近、テレビや映画などで手話を目にする機会は多くなりましたが、実際に体験することはなかなかないと思います。今回の交流会では、他学科のみなさんにわずかな時間ではありますが、手話を体験してもらいたいと思い、企画しました。

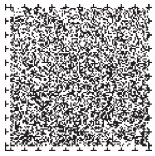
まずは、手話通訳学科の１日の様子を映したムービーを観てもらいました。教官室に声をかける時も、もちろん実技の授業中も、すべて日本手話での会話なので、ムービーには音声が入っていません。私たちにとってはそれが日常ですが、他学科の学生には珍しい光景だったようです。

次に手話で色と形を伝えるゲームを行いました。色のついた図形を覚えて伝達していくというものですが、左右逆に伝えてしまったり、色が違ったりしてうまく伝えることができず四苦八苦していました。手話で物の大きさや形を説明することは一見簡単そうに見えますが、実は難しいのだということが実感してもらえたと思います。

交流会では、障害者の立場を体験する「疑似体験」などもあり、改めて障害のある人、それをケアする人、それぞれの視点から各分野について考えることができました。また、各学科とも、学生とはいえプロフェッショナルを目指す者としての意識の高さを感じました。とても有意義な時間となりました。

リハビリテーション体育学科　１年　橋本　拓

リハビリテーション体育（以下RS）学科では、まず初めに、RSとは何か？普段の講義や課外活動では何を学んでいるのか？等についてパネルを使って説明を行い、次に、移動しながら実際にRS学科フロアにある部屋・設備の紹介をしました。最初の部屋では、セラピューティック・レクリエーション概論という授業で使用するRS学科伝統の太鼓の紹介、次の部屋では運動負荷試験概論で使用する車いす用トレッドミルと自転車エルゴメータの説明を行いました。そして通称プレイルームと呼ばれ、実際に体操や軽い運動が出来、その為の用具が揃っている運動学習実習室について解説を行いました。最後に、そのプレイルームにスポーツ用の車いすと段差・ストレッチマットを持ち込んで、キャスター上げ、その状態での前進・後退、段差昇降、悪路走行などの車いす操作法を披露しました。



各学科を見学し、実践を交えて体験できた事によって、それぞれの専門性についてより理解を深められたように思います。又、自分達としても、RS学科で日々行っている事を振り返り伝える事で、これから進んでいく道を再確認できました。

視覚障害学科
「アイマスクをしてお茶をいれてみよう」

リハビリテーション体育学科
「車いす操作法の披露」

〔センター行事〕

ふれあいコンサート開催される

管理部企画課

去る10月28日（水）に日本を代表するピアニストの一人である田部京子さんによる「ふれあいコンサート」が開催されました。

このコンサートは所沢市民文化センターのご提案により、「世界的な演奏家の演奏にじかに触れてもらい音楽芸術に親しみを感じていただき、広く世界の文化に関心を持ってもらうこと。」を目的として開催されたもので、田部京子さんは平成17年９月に当センターでコンサートを開催されて以来、２回目の訪問となりました。

当日は、所沢市内の２つの小学校を訪問されたあと、当センターへお越しになられ、演奏会場となったセンター講堂には、センターの利用者や患者様、職員のほか、国立職業リハビリテーションセンターの訓練生、中国帰国者定着促進センターの入所者の方々など約200人が詰めかけました。

今回のコンサートでは、メンデルスゾーン（1809年生）、シューマン（1810年生）、ショパン（1810年生）、リスト（1811年生）という同年代のロマン派の作曲家の作品を取り上げられ、その抒情溢れる演奏で観客を魅了しました。演奏された曲はメンデルスゾーンの「ないしょ話」「ヴェニスのゴンドラの歌第２番」（『無言歌集』より）、シューマンの「飛翔」（『幻想小曲集』より）、ショパンの「別れの曲」、リストの「愛の夢第３番」の５曲でした。

後半の会場の皆様とのふれあいコーナーでは、交通事故に遭ってリハビリが必要になりピアノが弾けなくなったときの苦労話やドイツ留学中の話など、日頃聞けないような体験談を披露していただきました。会場からは「壁にぶつかったときそれを乗り越えるには？」「尊敬するピアニストは？」「中高年になってピアノをはじめるには？」などの質問が出され、その一つ一つに懇切丁寧にお答えいただきました。

会場の皆様には、コンサートホールとは違う身近な空間の中で、美しいピアノ演奏を堪能できたばかりでなく、コンサートがより身近なものと感じられたことと思います。

最後にアンコール曲として、ラフマニノフの前奏曲「鐘」が演奏され、会場からは花束とセンターの利用者が訓練で作製したさおり織りのランチョンマットが贈られ、盛大な拍手の中、コンサートは終了しました。田部さんありがとうございました。

〔お知らせ〕

総合リハビリテーション賞の受賞について

このたび当センター病院看護部看護師道木恭子さんが医学書院の「総合リハビリテーション賞」を受賞されました。受賞論文は、『脊髄障害女性の妊娠・出産に関する調査研究』(総合リハ36：701-706, 2008）で、脊髄損傷および二分脊椎による脊髄障害がある女性56人の妊娠・出産の現状やさまざまな問題に関する調査研究をまとめたものです。その授賞式が去る９月30日に医学書院本社にて行われました。

受賞にあたり、道木さんよりこれまでの調査研究のあゆみなどについてご寄稿いただきましたのでここに掲載いたします。

総合リハビリテーション賞を受賞して　～これまでの歩み～

道木　恭子

今回、医学書院から総合リハビリテーション賞をいただきました。選考委員の先生方からは、「脊髄障害女性の妊娠・出産に関する国内初めての研究であり、10年間にわたる貴重なデータの集積であること、当事者の問題が医学的な面だけではなく、日常生活、心理面まで広く捉えられていること、今後の研究に期待していること。」が選考理由であるとの励ましのことばを頂きました。

私が、脊髄障害の女性の妊娠・出産について研究を始めて10年になります。きっかけは、泌尿器科外来にいたころ、脊髄損傷の女性から、「結婚を申し込まれているけど、私は子どもが生めるの？結婚していいの？」と相談を受けたことでした。私は、生半可な知識で答えてはいけないと思い、勉強を始めました。当時入手できた文献は、欧米の文献がわずかと、国内では症例報告の文献が７本だけでした。とりあえず、勉強したことを伝えたのですが、牛山先生に、「自分のデータを持たないと、人に指導はできない」と厳しい指導を受け、その言葉から研究者としてスタートしたように思います。先ずは、脊髄障害で出産経験のある人を見つけて会って妊娠中の様子、分娩経験などについて話を聞きました。次に、その人に出産経験者を紹介してもらって、また会いに行くという形で調査を続けました。しかし、出産経験者を見つけることは容易ではなく、パラリンピックの選手の協力で、北海道から九州まで広い地域で経験者を探すことができました。ようやく遠方に出産経験者がいることがわかったのですが、会いに行く資金がないため、電話と手紙で話を聞きました。そうこうしながら３年かけて30名の人から話を聞くことができました。次に“このデータをどうまとめて、どう伝えればいいか？”が大きな問題でした。現場の看護師の私にとって、学会や論文は無縁でしたから、伝え方がわかりません。困っていた私を大学院に導い

てくださったのが初山先生でした。しかし、大学院に入学したものの、“英語の論文は読めない、統計学はちんぷんかんぷん”の私に看護学の教授は、「何しにきたの？」と厳しく、さらに「脊髄損傷なんてわからないし、車いすの女性が子どもを産むことも想像できない」と指導が受けられない状態でした。そこを初山先生がまた救ってくれました。「ひとつの研究には10年かかるものです。10年たてば、きっとあなたの話を聞いてくれる人がでてきます。」「自分がやりたいことは頭をさげてでもおやりなさい。」先生から頂いた言葉は今でも心に残っています。博士過程の途中で、先生が亡くなられた時はショックが大きく、研究も一時放り出してしまいました。しかし、拾ってくれる神様はいるもので、岩谷先生が二分脊椎症について指導し、二分脊椎症協会とのつながりをつけてくださったおかげで、新たな研究に踏み出すことができました。そして以前、国リハにいらした木村哲彦先生、陶山先生、また、国際医療福祉大学大学院の先生方が、もう一度頑張るようにと励まし、研究指導をしてくださいました。国リハでは横田看護部長をはじめ看護師の方々、訓練部や研究所の方々が専門分野からの貴重なアドバイスをくださいました。こうした恩恵も初山先生が残してくださった財産だと深く感謝しています。

現在は、これまで知りえたことを、当事者や医療関係者の方々に伝えられるよう「妊娠・出産マニュアル」の作成に携わり、月に１回の相談窓口を担当させていただいています。

今後の目標は、障害のある方々のセックスカウンセラーになることです。現在、性科学学会でカウンセラーの認定資格をとる勉強を始めましたが、５年以上はかかるので、諦めずにマイペースで続けていきたいと思います。

「第17回総合リハビリテーション賞」授賞式（医学書院本社）

〔お知らせ〕

創立30周年記念　WHO指定 研究協力センターセミナー 「共生社会と国際協力を考える」開催のご案内

管理部企画課

当センターは障害分野における国際協力として、海外のリハビリテーション専門家の研修、開発途上国の技術協力への協力などの活動を行っています。また、“障害の予防とリハビリテーションに関するWHO指定研究協力センター”としての活動の一貫で、障害に関するセミナーを開催しています。

本年度は当センターの創立30周年を記念して、障害とリハビリテーションについての今日までの我が国の国際協力の取り組みを振り返り、今後の国際協力の発展について考えるセミナーを開催いたします。

当日は、WHO本部の障害とリハビリテーションチームの専門家や中東で地域に根ざしたリハビリテーションを展開するJICA専門家による基調講演、日本、中国、韓国からの発表、ディスカッションを下記のとおり行います。

国際協力の現場からの具体的な報告もありますので、興味のある皆様、是非ご参加下さい。

・開催日時：平成22年２月13日（土）10：30～16：30

・開催場所：国立障害者リハビリテーションセンター学院講堂（所沢市並木４－１）

・参 加 費：無料

・使用言語：日本語と英語（日英同時通訳）手話通訳、要約筆記あります

・申し込み、問い合わせ先：事務局　国立障害者リハビリテーションセンター
管理部企画課国際協力係　西村、千田
TEL：04-2995-3100（内2148、2149）
FAX：04-2995-3661
E-mail：whoclbc@rehab.go.jp

※申し込みは２月４日（木）までにFAX、郵送、メールでお願いします。
申し込み用紙は上記事務局にお問い合わせいただくか当センターのホームページ
http://www.rehab.go.jp/whoclbc/japanese/jiritsu/h21_jiritsu.html
でご覧下さい。

プログラム

10：30　　開会挨拶　岩谷　力（国立障害者リハビリテーションセンター総長）

10：40〜12：00　基調講演

1「WHOの障害者リハビリテーションの動向、CBRコンセプト」
Chapal Khasnabis　WHO DAR テクニカルオフィサー

2「シリアにおけるCBRの展開」
中村信太郎　JICAシリアCBR専門家

（12：00〜13：00　昼食）

13：05〜14：25　発表

1「国際標準化とアクセシブルデザイン」
山内　繁　早稲田大学人間科学学術院特任教授

2「マレーシア、視覚障害者へのマッサージ技術支援と鍼灸課程創設支援」
笹田三郎　JICAシニアボランティア

3「リハ専門家人材養成と国際協力」
冨岡詔子　JICA青年海外協力隊技術顧問
佛教大学保健医療技術学部作業療法学科教授

4「中国リハセンター設立から現在の日中の協力」
董　浩　中国リハビリテーション研究センター副センター長

5「韓国リハビリテーションセンターの国際協力」
Yong Hur　韓国リハビリテーションセンター長

（14：25〜14：35　休憩）

14：35〜15：40　パネルディスカッション　国際協力の今後の展望

1　田和美代子　JICA人間開発部社会保障課長
2　Chapal Khasnabis
3　中村信太郎
4　董　浩
5　Yong Hur
6　岩谷　力

15：40〜16：10　会場との質疑応答

16：15　　閉会挨拶　江藤文夫
（国立障害者リハビリテーションセンター更生訓練所長）

16：40〜17：20　懇談会